様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０３７１７

研究課題名（和文）グローバル・バリュー・チェーンにおけるメキシコの役割：付加価値貿易分析

研究課題名（英文）The role of Mexico in GVCs: Value Added Trade

研究代表者
咲川　可央子（Sakikawa, Kaoko）

青山学院大学・地球社会共生学部・准教授

研究者番号：６０６３４３５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究と深く関わる研究成果として、「第5章　メキシコにおける所得格差の変遷：地域間格差、グローバル化、インフォーマル部門の考察から」浜口伸明編『ラテンアメリカ所得格差論：歴史的起源・グローバル化・社会政策』国際書院を発表した。この研究により、メキシコがグローバル・バリュー・チェーンに組み込まれたことによる恩恵はどの程度で、それが地域、産業、企業、労働者にどのように分配されているのかが明らかとなった。また、研究の過程で、今後メキシコが「中所得国の罠」から脱出するためには、グローバル・バリュー・チェーンの「高度化」がキィとなることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果では、メキシコがグローバル・バリュー・チェーンに取り込まれることには成功したものの、その恩恵は外国直接投資が流入して近代化する地域、産業、企業とその労働者に留まっており、依然として甚大な格差があることを科学的に実証した。既存研究を独自の視点でサーベイし、最新データを用いて実証したことは既存研究を一歩進めており学術的な意義がある。メキシコと日本の経済関係は緊密化する中、メキシコの状況を科学的に明らかにすることはメキシコのみならず日本にとっても意義深い。岸田首相により「新しい資本主義」が標榜され、改めて分配が重視されつつある日本にとっても、今後ますます本研究成果は社会的意義を持つだろう。

研究成果の概要（英文）：I published the article titled "Chapter 5: The transition of income disparity in Mexico: Regional disparity, globalization, and informal sector" Nobuaki Hamaguchi eds., Income disparity in Latin America: Historical origin, globalization, and social policy, Kokusaishoin, which is profoundly related to this study. This study clarified how much Mexico gained by participating in Global Value Chain and how it distributed to each region, industry and labor. The continuing research implied that the upgrading of Global Value Chain is crucial in order that Mexico would be able to escape from the middle-income trap.

研究分野：経済学

キーワード：メキシコ　グローバル・バリュー・チェーン　格差　付加価値貿易

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 世界経済でグローバル化が進み、企業は中間生産物や必要なサービスを国内のみならず海外から調達し、財やサービスを生産・提供するようになった。１つの財を生産するための生産活動を細かな工程にわけ、それぞれの工程ごとに最も効率の良い国で生産する、グローバル・バリュー・チェーンが世界各国へと広がっている。企業は、労働費用、輸送費用、取引費用を含む諸費用と、市場規模や発展段階など市場としての規模や価値を鑑みて、どの国でどの工程を生産するかを決めている。

(2) このように、グローバル・バリュー・チェーンが構築されると、輸入や輸出など貿易データを用いた従来の分析のみでは、世界貿易の実態を把握することはできない。なぜなら、生産工程で新たに生み出された付加価値が中間財として国境を越えて取引される度に輸出額・輸入額が計上される二重計上の問題が生じるためである。例えば、メキシコが中国から輸入した中間財を用いて、米国向けに輸出財を生産する場合、国内で生み出して輸出する付加価値額よりも輸出額の方が大きい。あるいは、米国で生産されメキシコに輸出された財が、メキシコで中間財として使用された後、米国に再輸出された場合、米国で生み出された付加価値の最終消費地はメキシコではなく米国である。

(3) このように、世界貿易がグローバル・バリュー・チェーンによる複雑な国際分業へと変化するのに伴い、世界貿易を正確に捉えるための付加価値貿易分析が進められてきた。複雑なグローバル・バリュー・チェーンを通じて行われた輸出・輸入のうち、各国で付加価値がどの程度創出されたかを測る分析である。国際産業連関表を用いて、製品価額に対する各国の付加価値源泉比率を求め、貿易統計で見た輸出額と付加価値輸出額との間にどれだけ隔離があるかを検証することにより、客観的かつ正確な比較優位構造が徐々に明らかになってきた。

(4) こうした背景の下、本研究では、積極的な自由貿易政策を推進し、グローバル・バリュー・チェーンに組み込まれたメキシコを対象に、付加価値貿易の分析を行いたいと考えた。また、その前に、メキシコがグローバル・バリュー・チェーンに組み込まれたことの恩恵はどの程度で、それが地域、産業、企業、労働者にどのように分配されているのかを明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

本研究の目的は、グローバル・バリュー・チェーンに組み込まれ、日本との経済関係の緊密化が顕著なメキシコを対象に、付加価値貿易分析を行うことである。米国への近接性と安価な賃金を有するメキシコは、積極的な自由貿易政策を推進し、グローバル・バリュー・チェーンに盛んに組み込まれている。近年、国際産業連関表が整備されるにつれ、複雑なグローバル・バリュー・チェーンを通じて行われた輸出・輸入のうち、各国で付加価値がどの程度創出されたかを測る付加価値貿易分析が進められてきた。この付加価値貿易分析を行うことにより、メキシコの真の国際貿易構造を明らかにし、グローバル・バリュー・チェーンを通じた日本との経済関係や世界経済でグローバル・バリュー・チェーンに継続的に組み込まれる条件について考察したいと考えた。

３．研究の方法

グローバル・バリュー・チェーンに組み込まれたメキシコの真の国際貿易構造を明らかにするために、1．付加価値貿易についての既存研究のサーベイ、2．国際産業連関表データの整備、3．現地調査と海外の専門家との意見交換、4．国内の専門家との意見交換、5．計量分析と結果の考察、6．理論的考察、7．論文の作成と発表、を行う。

４．研究成果

(1) 本研究と深く関わる研究成果として、「第 5 章　メキシコにおける所得格差の変遷：地域間格差、グローバル化、インフォーマル部門の考察から」浜口伸明編『ラテンアメリカ所得格差論：歴史的起源・グローバル化・社会政策』国際書院を発表した。この研究により、グローバル・バリュー・チェーンに組み込まれたことによる恩恵はどの程度で、それが地域、産業、企業、労働者にどのように分配されているのかが明らかとなった。本稿の第１節では、1980 年代後半から 2014 年までのメキシコの所得格差の変遷を、いくつかの代表的な不平等度指標によって確認した。第２節では、メキシコの州間で所得格差がどの程度であるか、また地域格差がどのように変遷しているかを確認した。さらに、主に Barro and Sala-i-Martin（2004）によって提唱されたσ収束及び絶対的β収束を検証した。第３節では、既存研究を元に、グローバリゼーションがどのように所得格差、地域格差に影響を及ぼし得たかについて考察した。ここで特に注目したのは、1980 年代半ば以降の経済自由化政策と 1994 年の NAFTA 発効が、格差にどのような影響を及ぼし得たか、という点であった。第４節では、メキシコで多く見受けられるインフォーマル部門の存在が所得格差とどのように関わっているかについて考察した。①インフォーマル部門が労働力全体に占める割合はどの程度なのか、②その割合はどのように変遷しているのか、③地域間によってその特徴は異なるのか、④インフォーマル部門は開発経済学が取り扱うように貧困に陥るリスクが高いのか否か、⑤何故中進国メキシコにおいてインフォーマル部門が多く存在するのかについて考察した。

(2) 結果としては、メキシコが貿易自由化へと転換した 1980 年代から 1990 年代半ばまでは、伝統的貿易理論の予想に反して所得格差は拡大した。地域格差の指標であるσは上昇し、絶対的β収束は存在せずに発散があった。NAFTA 発効後の 1994 年から 2010 年には所得格差は低下し、σは低下し、絶対的β収束の存在が統計的に支持された。メキシコを組み入れたグローバル・バリュー・チェーンが成熟した 2010 年以降は、所得格差低下の傾向が弱まるか上昇傾向にあり、σは横ばいかやや上昇、絶対的β収束の存在は統計的に支持されなかった。結論として、1990 年代半ば以降メキシコの所得格差は縮小しているものの、国際的に見ても、依然としてその所得格差は大きいという事実は否めない。グローバリゼーションの機会を捉えて FDI が流入して発展し近代化する地域、産業、企業とその恩恵を受ける労働者がいる一方で、近代化に遅れて停滞する地域、産業、企業、労働者がいる。インフォーマル部門の存在が顕著なまま、近代的な経済と伝統的な経済とが並立する二重経済がメキシコで色濃く残っているといえよう。メキシコの制度や政策が、こうした二重経済の解体を妨げている面も否めない。

(3) 上記の点は明らかになったものの、付加価値貿易分析を鋭意継続しており依然としてメキシコの真の国際貿易構造は明らかとなっていない。なお、文献サーベイをする中で、今後メキシコが「中所得国の罠」から脱するためには、グローバル・バリュー・チェーンの「高度化」がキィとなることが示唆された。今後、こうした点も含めて研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 咲川可央子
２．発表標題 メキシコの付加価値貿易
３．学会等名 開発経済学研究集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 咲川　可央子
２．発表標題 グローバル・バリュー・チェーンにおけるメキシコ
３．学会等名 開発経済学研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 咲川　可央子
２．発表標題 メキシコの所得格差
３．学会等名 開発経済学研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 咲川　可央子
２．発表標題 メキシコの事例
３．学会等名 ラテン･アメリカセミナー
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 浜口 伸明	４．発行年 2018年
２．出版社 国際書院	５．総ページ数 256
３．書名 ラテンアメリカ所得格差論 ： 歴史的起源・グローバル化・社会政策	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関